

対話者の声、「自分自身」の声

『結婚の生理学』における認識論的問題（2）

佐久間 隆

はじめに

若きバルザックの出世作となった『結婚の生理学』（1829年）は、後年、『人間喜劇』の中の「分析的研究」セクションに収められた。このセクションは作家自身によって『人間喜劇』が含む三つのセクションのうちの最上位に置かれ、「結果」と「原因」を踏まえて「原理」が探求されるべき場とされていたものである。しかも1842年に始まった『人間喜劇』の刊行が一応の完結を見た1846年の時点では、他の該当作品が未刊行であったため、『結婚の生理学』が「分析的研究」セクションに含まれる唯一の作品、すなわち『人間喜劇』の頂点に位置していたことになる。

しかし、このようにバルザック自身がその重要性を明示しているにもかかわらず、『結婚の生理学』はしばしば読者を困惑させ、作者の真意をめぐり解釈、作品の評価が一定しない。というのも、作中、真面目な社会批判と思しき言辞と諷刺的な冗談めかした語り口が交錯し、ディスクールが一貫性を欠いているように見えるからである。

そこで前稿¹においてわれわれは、『結婚の生理学』におけるこのディスクールの非一貫性それ自体を取り上げて、この現象を、「現実 (le réel)」を包括的に認識・表象したい作家の欲望とそれから逃れていく「現実」とのあいだの相克という観点から考察した。その際われわれが特に注目したのが、ディスクールの主体がはらむ「他者の声」というものであった。本稿でも引き続き同様の問題を扱う。そのために、ここで『結婚の生理学』という作品の概略と前稿におけるわれわれの分析とを簡単に確認しておこう。

『結婚の生理学』は全体が3部30章および「序言」と「後書き」から構成されており、「妻の姦通をいかに防ぐか」を著者＝論者が読者に教示する、と

¹ 拙稿「そそのかす声たち——『結婚の生理学』における認識論的問題（1）」、『仏語仏文学研究』第29号、東京大学仏語仏文学研究会、2004年5月、105-125頁。

いう体裁を取って話が進む。ところが、章を追うごとに夫側の危機が進行していき、結局、姦通防止の不可能性が確認され、最後は奇妙な姦通礼賛で作品は幕を閉じることになる。こうして、この作品では「論述的ディスクールの自己転倒」とでも呼ぶべき現象が起こっている。

われわれはまず、この論述的ディスクールの主体がバルザックその人ではなく、ある程度虚構化された「若き独身者」なる語り手であることを明確にしたうえで、その語り手によって作品の生成過程が回想されている「序言」に目を向けた。われわれの分析がそこで明らかにしたのは、語り手の内部に具体的な発話として響きながらも語り手自身のものではない声——すなわち、「一者」としての語り手に対する「他者の声」——が作品生成において決定的な役割を果たしていることであった。この他者の声がほぼ一貫して、なおかつ多様な形で、結婚生活のさまざまな場面における隠された真実を語り手に暴露し、また語り手を教唆して作品執筆に向かわせていた。しかも、そのそそのかす声による暴露や教唆はしばしば主体の制御を超えており、語り手に半ば執筆を強いるものであった。

次にわれわれは、「観察し、分析し、洞察する」という方法が、バルザック小説の典型的な語り手の態度、言い換えれば現実を認識し表象するバルザックの本質的方法であると同時に、『結婚の生理学』の語り手が提示する生理学的方法でもあることを示した。この若き独身者は、結婚を一種の病とみなし、医学＝生理学的に扱おうとする。そして妻が姦通へと漸次進んでいく一連の流れが、「最初の症候」と題された省察 8 から「最後の症候」と題された省察 27 まで、順を追って叙述される²。姦通へと向かう病の進行を食い止めるためには、「生理学者」は症候という表面の情報を見逃さず、そこから隠された病理の実態を正しく見抜かなければならないのだ。

ところが夫は敗北する。そこで続いてわれわれは、生理学的方法の不備が露わになり、ディスクールの流れが夫の敗北へとはっきり向かい始める省察 15、16 のうち、省察 15 の検討を行った。この省察において語り手は、対象を「観察し、分析し、洞察する」卓越したシステムとしてラヴァターの観相学的方法を称揚し、妻の姦通防止のために用いるよう読者に勧める。しかし、例を挙げて実践場面を説明する語り手のディスクール自体が、この方法の有効性に対する疑問を読者に抱かせてしまう。「巨大な＝無限の細部 (immenses détails)」といった表現や、あるいは語り手が観相学的洞察を「観察対象がパロールを発した」とみなしていることに注目したわれわれは、一見体系的に

² 『結婚の生理学』では、「章」の代わりに「省察」という区分けを用いている。

見える解釈コードが不十分なものでしかなく、『結婚の生理学』における「観察、分析、洞察」という方法が本質的には主体の制御を超えた他者の声によって主体に押し付けられたものであることを明らかにした。そして、語り手の内部に響くそそのかす声たちは、作家が依拠しようとする体系に常に裂け目を入れて彼を導く「現実」の声とも言えるのではないか、と結論づけた。

さて、『結婚の生理学』が提起する認識・表象の問題は、以上のことに尽きるわけではない。本稿の目的は、作品の一貫しないディスクールとこの認識論的問題の関わりを、「語り手をそそのかす声」とは違ったタイプの「他者の声」との関連において、なおかつ「ディスクールの自己転倒」現象を省察 15 よりさらにはっきり示している省察 16 の検討を通して考察することである。

1. 語り手の内部に響くさまざまな他者の声

『結婚の生理学』のディスクールには、興味深いさまざまな「他者の声」が響いている。それらの具体的な検討に入る前に、われわれが扱う「他者の声」とは基本的にどのようなものなのか、あらためて明確にしておこう。

まず「声」について。例えばロラン・バルトは、コード（記号体系）を「声」と言いかえながら——「諸々の文化的コード」を「知識の声」と呼ぶなど——、「テキスト」を「複数の声の織物」と定義している³。われわれが「他者の声」と言う場合、そこにこうしたメタフォリックな含意はない。われわれにとって問題なのは、具体的かつ肉体的な声として発せられたパロールである。

次に「他者」について。「他者」は「一者」を前提とし、その「一者」に対して異なる意識、異なる自我を有する存在と規定する。『結婚の生理学』においては、ディスクールの基本的な主体である語り手の「若き独身者」が当然この「一者」に相当する。したがって、われわれの検討していく「他者の声」とは、「語り手のうちに具体的な発話として響きながらも、語り手に対してある独立性を持った、完全には語り手自身のものではない声、あるいは少なくとも読者がそう印象づけられる声」と、このように規定することができる。また、われわれは、そのような声の存在が何らかの表現によって示唆されている場合も考慮する。

以上のパースペクティヴから、『結婚の生理学』の語り手には、すでに検討

³ Cf. Roland Barthes, *S/Z*, Éditions du Seuil, coll. « Points Essais », 1976, pp. 27-28.

した「そそのかす声」以外に大きく分けて三種類の「他者の声」の存在が指摘できる。

1) 挿入された他の語り手の声

エリック・ボルダスも指摘するように、『結婚の生理学』には引用が非常に多い⁴。ボルダスは、引用によって発話行為および発話者のアイデンティティが混乱させられることに注目し、その好例として、省察 24 の後半で紹介される夜会のエピソードを挙げている。ルブラン大公が開いたある夜会の席上、女性たちが用いる姦通の手管が話題に上り、そこで一人の老人が自分の経験談を書いた小冊子を長々と朗読するのだが、実はこの朗読されたテキストは、実在するリベルタン小説の一節をバルザックがほぼそのまま借用したものである。こうして、挿入されたテキストには二つの異質な発話行為が重ね合わされることになる。すなわち、このテキストは元々のリベルタン小説の一節としての性格を持ちつつ、同時にバルザック的語り手のディスクールの一部——しかも老人のディスクールの再現という形を取って——となっているのである⁵。

確かに、『結婚の生理学』には、警句、短いパッセージ、物語のはめ込み、といったさまざまな形で引用が散りばめられており、この手法によって、ときにディスクールの主体のアイデンティティが曖昧になる。とはいえ、ボルダスが何より問題視するのが、語りのディスクールと分析的ディスクールの対立や相互感染の現象であるのに対して、われわれにとっては、若き独身者の声と挿入された他の語り手の声との区別が曖昧になる状況こそが問題になる。このわれわれの観点からすれば、省察 24 のリベルタン小説の引用は特に問題ではない。そこでは、まず大枠として若き独身者によってある挿話が提示されており、そのうえで、その挿話の中に挿入されたテキストを語っているのが若き独身者ではなく、「ある老人」という彼が創造した人物であることがはっきりしているからである。

注目すべきは、むしろ省察 17 の冒頭である。この省察は、ある会議のメンバーたちの描写から始まる。そして語り手自身についても、第 2 段落で、「しがない書記たる私は、会議の議事録を作成するためにこの事務機のところに

⁴ Éric Bordas, « Au commencement était l'impossible (la *Physiologie du mariage*) » in *Balzac ou la tentation de l'impossible*, SEDES, 1998, p. 173.

⁵ *Ibid.*, pp. 173-174.

座っていた⁶」（1060）と述べられる。特別な記述がない以上、当然読者はこの「しがない書記たる私」を若き独身者とみなして読み進む。ところが、会議の終わりまでその模様が語られた時点で、読者は次の言葉を目にして、「しがない書記たる私」が本当は誰であったかを知ることになる。

世の風俗と結婚の改善を目指して最近ロンドンで結成され、ずっとパイロン卿の嘲笑を浴びてきたその協会のこの討議の様子は、有名なクラッターバック船長の本従兄弟である W. ホウキンス様のお心遣いによってわれわれに伝えられたものだ。（1063）

引用の終わりを示すこの説明の直後、若き独身者は自らを「本書の筆者」あるいは「筆者」と二度称しており、読者に対してディスクールの主体の変化を強調している。ここから示唆されるのは、若き独身者が読者側の混乱を十分に意識していること、したがって、引用的手法による発話者のアイデンティティの曖昧化を彼が故意に利用しているということである。なるほど、そのためにここで用いられている方法は、引用であることを事前に読者に知らせないでおくという単純なものである。しかし、この一節は若き独身者の矛盾する二つの傾向を示している。一方で、彼は他者の声を自分自身の声のように響かせようとし、他方で、引用であると言明することによって、あくまで二つの声のあいだの異質性を明示しようとしているのである。

さて、これと同じ範疇に入ると思われる興味深いもう一つの現象に移ろう。省察1の冒頭、語り手は擬人化された「生理学」に二人称「お前」を用いてしばらく問いかけたあと、今度は、読者一般に向かうかのように、「あなた方」に対して語りかける。しかし、実際には、彼は「あなた方」と言いながら、ある種の想像上の読者に向かってラブレー風に懇願するのだ。

われわれ全員にとつての教師であるラブレーにならって、あなた方に対して私にこう言わせて頂きたい、「有徳の方々よ、あなた方に神様の救いとご加護がありますように！ あなた方はどこにおられるのですか？ 私にはあなた方の姿が見えないのです。いま眼鏡を掛けますから、お待ちください。おお、見えますよ。あなた方、奥様方、お子さん方、皆さん健やかでいらっしゃいますか？ 喜ばしきことです。」

⁶ Honoré de Balzac, *Physiologie du mariage*, dans *La Comédie humaine*, édition établie sous la direction de Pierre-Georges Castex, Gallimard, « Pléiade », 1976-1981, 12 vol., t. XI, p. 1060. 『結婚の生理学』の引用に際しては引用後の括弧内に頁数を記す、また『人間喜劇』については以下 CH と略記する。

しかし、私が書いているのは、あなた方のためではない。あなた方には大きな子供がいるのだから、すべては決定済みなのだ。(1015)

上のラブレー風の言葉が実際にラブレー自身のものであれ、バルザックの手になるものであれ⁷、とにかく挿入された調子は本来の若き独身者のものとは明らかに異なっている。そしてここで重要なことは、語り手が読者に二通りに語りかけ、それによって読者に対して正反対の二通りの態度を示していることである。語り手はある種の想像上の読者に向かってラブレーの声で呼びかけながら、そのあと即座に自分本来の声で彼らを排除している。しかも、語り手はこの操作を三度繰り返す。それはあたかも、若き独身者が二人の語り手を交互に演じ分けているかのようだ。したがって、他者の声を挿入することによって、ここで語り手自身が二重化していると言える。こうして作品のはじめの段階において、語り手が『結婚の生理学』のディスクール全体を差し向けるべき相手、すなわち「聴き手⁸」のタイプが限定されていき、結局、「妻に姦通される潜在的危機を抱えた夫」に確定されることになる。

第一の例では、語り手は他者の声を自分の声のように響かせながら、その他者に同一化することを拒んでいた。第二の例では、他者の声を用いて読者に語りかけることによって、彼はディスクールの主体として二重化している。以上のようにして、挿入された他の語り手の声は、ディスクールの主体のアイデンティティを危うくするのである。

2) 想像上の読者・対話者の声

語り手は、ディスクールのほぼ全般にわたって、呼びかけを行う。これは、語り手が聴き手である夫に妻の姦通防止法を教示するというテキスト空間の基本的設定を考えれば、なんら不思議ではないように思われる。しかし、その呼びかけはあまりにも頻繁かつ多様である。語り手は、聴き手をほとんど

⁷ ルネ・ギーズは、引用部のラブレーを模した言辞に関して、『第四之書』プロローグの冒頭部分をバルザックが要約したものだと指摘している。René Guise, note 4 de la page 916, CH, t. XI, p. 1780 を参照。

⁸ 語り手と機能的対をなす「聴き手 (narrataire)」については、ジェラルド・ジュネットによる「物語の受け手」という基本的定義にしたがう。Gérard Genette, *Figures III*, Éditions du Seuil, « Poétique », 1972, p. 227 を参照。なお、われわれはすでに、『結婚の生理学』における語り手と聴き手との間の「文学的コミュニケーション」の問題を他者の声との関連において論じている。拙稿「バルザック『結婚の生理学』における文学的コミュニケーション」、『フランス語フランス文学研究』、日本フランス語フランス文学会、第 85・86 合併号、2005 年 3 月、232-243 頁を参照。

常に二人称で呼んでディスクールに取り込んでいるが、彼（ら）に向かって「読者よ」と単に呼びかけるのみならず、「親愛なるパンタグリュエリストの諸君よ」（920）などと、相手の性質を形容するさまざまな表現を使って呼びかけたりもする。他方、呼びかけられる側が聴き手以外の場合もあり、ここではレトリックで言うところの頓呼法もしばしば用いられている。たとえば、すでに軽く触れたが、省察1はいきなり「生理学よ、お前は私にどうしろと言うのだ？」（913）という語り手の生理学に対する擬人的問いかけで始まっているし、別の箇所では、語り手はその場にいるはずもない「ダブルベッドの発明者」に向かって突然呼びかけを行う。さらには、彼は偏頭痛にまで大仰に呼びかけてみせる。「おお偏頭痛よ、恋の保護者よ、夫婦の税金よ、夫の欲望という欲望が向かってきては息絶える盾よ！ おお、手ごわい偏頭痛よ！」（238）という風に。こうした頻繁かつ多様な呼びかけによって、テキストの対話的な性質が強く印象づけられる。

また、語り手は、多様な相手に呼びかけるだけでなく、自分の意見に反応するさまざまな人物を想像する。そして、それが聴き手である夫であれ、他の人物であれ、予想される架空の人物の反応・反論をしばしば語り手自らが口にし、さらに、その反論に対する自らの再反論を提示することによってディスクールを進めていく。たとえば、省察17の一節で、語り手は夫に向かって妻を丁重に扱うように説く。その直後、彼は「私には無数の声が聞こえる」（1080）と言って、夫たちからのさまざまな批判を列挙し、それに対して「これらやかましい抗議の声の一切にこたえて、ここに次の言葉を書き込もう」（*ibid.*）と話を続けるのである。こうした例は、作品のそこかしこに見られる⁹。

もう一つ、より興味深い例を引こう。省察4において、貞淑な女性とそれを狙う独身者の人口比率を計算した語り手は、状況が夫にとってかなり厳しいものであるという結論を導き出す。彼はそこで唐突に、この結論に対する道徳上の潔癖主義者たちの批判を予想し、上の例と同じように再反論を試みる。しかし、前例と違うのは、再反論に際して語り手が架空の批判者たちを「あなた方」と呼んで彼らを挑発したり、彼らに向かって問いかけなおしたりしていることである。そして、その自分の問いかけに対して今度は、信心

⁹ たとえば同じ省察17の別の箇所でも、語り手は自説を述べたところで「偏狭な精神の持ち主のうちには、次のように反論する人も出てくるかも知れない」（1074）と言って想定される反対意見を示し、やはりそのあとに「しかし、それに対する答えとして、筆者はこう明言しよう」（*ibid.*）と続けている。

に凝り固まった女性ならばこう言うだろう、と言って想定される彼女の言葉を直接話法で提示し、それに対してもすぐさま自らの再反論を述べる。ここで再び語り手は、さきほどの女性の反応を想像する。

「その男の人たちは司祭様のように純潔な生活をしていられないのですか？」とさっきの信心に凝り固まった女性は相変わらず言うだろう。

よろしい、奥様。

しかしながら、いいですか、[...] なのです。 (946)

直前まで潔癖主義者たちに対して「あなた方」と呼びかけていた語り手は、信心に凝り固まった女性の反応を想起すると、すぐにその女性に向かって「よろしい、奥様。しかしながら…」と語りかけている。この一節が示唆するのは、語り手がある人物の反応を想起すると、たちまちその人物が彼の目の前の対話者のようになってしまう、という語り手のディスクールの傾向である。実際、絶えず呼びかけや対話を行いながら、語り手はしばしば自らの目の前の対話者を変える。紛れもなく主要な対話相手である「妻に姦通される潜在的危機を抱えた夫」でさえ、必ずしも常に一様であるとは言えない。語り手の夫に対する呼びかけが多様な形容表現を伴うため、「妻に姦通される潜在的危機を抱えた夫」という大きな括りの中で、そのときどきの対話者はさまざまに差異化されている。

さて、われわれにとってさらに興味深いのは、ところどころで、想像上の対話者の声と語り手自身の思考とのあいだの境界が奇妙に、また曖昧に見えることである。

省察1に戻ろう。ラブレー風の声と自分の本来の声とを使い分けて一連の読者の排除を行った末、語り手は望ましい読者として「パニユルジュの弟子たち」(917)に向かって「あなた方」と呼びかける。注目すべきは、それに続いて「検閲官」についての疑問が提示され、さらにそこに別の声が介入してくる以下の箇所である¹⁰。

¹⁰ この「検閲官 (censeurs)」への言及は、『結婚の生理学』というテキストのジャーナリスティックな性格を物語るものであろう。1820年代、政府は政治的刊行物に対して厳しい検閲を行った。有力な政治新聞が廃刊や沈黙に追い込まれる中で現れたのが、「小新聞 (petits journaux)」と呼ばれる一群の刊行物であった。小新聞は、一見文学、諸芸術、市井風俗などを扱う非政治的な体裁を取って検閲を逃れつつ、政府を皮肉り当てこすった。バルザックは一時期小新聞に執筆しており、夫と妻を政府と民衆になぞらえる『結婚の生理学』にも小新聞的筆致が見て取れる。とはいえ、単純に『結婚の生理学』を政権への揶揄として片付けることはできない。刊行時にいくつか出た書

あの顕微鏡的な人たち、彼らときたら一点だけしか見ないわけで、要するに検閲官たちのことだが、彼らは何もかも言い尽くしてしまったのだろうか、何もかも検討し終わったのだろうか？ 結婚に関する本を書くことは、壊れた甕を元通りにすると同じように不可能だと最終の判決を下してしまったのか？

「そうだよ、頭のおかしい先生。結婚を圧搾機で絞ってご覧なさい。出てくるものと言えば、独身男には喜び、ご亭主たちには不安だけだろう。それがいつの世も変わらぬ教訓。百万頁印刷してたところで、それ以外の内容はないだろう。」

しかしながら、私の第一命題はこうだ、すなわち、結婚は、それを前に夫婦ともども神にご加護を祈る激烈な闘争であり、[...] 勝利は、つまり自由は、より抜け目のない方に宿るのだ。

なるほど。そのどこに新しい着想があると言うのか？

いや、私は昨日今日結婚したての夫たちに向かって語っているのだ [...]。
(917-918)

この箇所は、いくつもの問題をはらんでいる。

まず、検閲官についての疑問は誰に向けられたものなのだろうか？ 読者に向けてのものなのか、あるいは語り手の自問なのか？ 読者に向かってだとすれば、それは「パニユルジュの弟子たち」なのか、あるいは別の読者なのか？

検閲官に関するこの問いかけの位置づけが不明瞭なまま、ここである架空の対話者の声がディスクールに介入してくる。しかし、この対話者とはいったい誰なのだろうか？ 語り手の説明はない。確かに、この声は直前に示された検閲官の姿そのままに語り手を嘲っており、したがって介入者をそうした検閲官の一人とみなすことは困難ではあるまい。しかし、語り手が「パニユルジュの弟子たち」に「あなた方」と呼びかけたばかりであることを考え

評は概ね、パラドックスに満ちた作品に対する困惑を基調としているし、また省察 16 で嫉妬深い夫が説く権力論が、後年『社会要理 (*Catéchisme social*)』の中で、ほぼそのままバルザック自身の権力論として展開されるといった例が見られるからである。王政復古期のジャーナリズムの状況については、*Histoire générale de la presse française*, publiée sous la direction de Claude Bellanger, Jacques Godechot, Pierre Guiral et Fernand Terrou, PUF, 1969-1976, 5 vol., t. II, pp. 65-79 を参照。また、バルザックとジャーナリズムとの関わりについては、鹿島茂「ジャーナリズムとバルザック」(バルザック、『ジャーナリズム性悪説』、鹿島茂訳、ちくま文庫、1997 年、272-306 頁)が、非常に目配りよく概観している。『結婚の生理学』の書評については、Pierre Barbéris, « L'accueil de la critique aux premières grandes œuvres de Balzac, 1828-1830 », in *L'Année balzacienne*, Garnier, 1965, pp. 62-65 を参照。なお、『社会要理』のテキストは、Balzac, *Le « Catéchisme social » précédé de l'article « Du gouvernement moderne »*, textes établis et commentés par Bernard Guyon, La Renaissance du Livre, 1933, pp. 102-151 に見られる。

ると、この悪意を持った対話者の声の介入はいかにも唐突に見える。

続いて、語り手は反論という形で自らの第一命題を提示するが、これにも架空の反応があり、さらにそこへ語り手が言葉を加えている。では、ここで「なるほど。そのどこに新しい着想があると言うのか?」と言っているのは誰なのだろうか? 先ほど介入してきた悪意の対話者と考えるのが自然だろう。しかし、それならば、なぜ二番目の声は最初のときのようにギユメに括られて示されていないのだろうか? それは不注意によるのか、それとも故意なのだろうか?

以上に挙げた疑問や奇妙さに関して、明確な答えは導き難い。しかしながら、上の引用部分におけるディスクールの流れを追ってくと、これら架空の対話者の声が、想定される一読者の反応を単に採り上げたものではなく、むしろ語り手の思考の一部をなしているように思われてこないだろうか。語り手は、介入する声を受けて、第一命題および宛先という著作の基本的要素を提示する。しかも、その作業は、自問とも取れる検閲官についての疑問に導かれる形で行われているのである。

もう一例を挙げよう。省察 18 において、語り手は聴き手である夫に向かって妻の姦通防止法を説いているのだが、そこで次のような一節が現れる。

したがって、あなたの最初の政策による密かな圧政を正当化する方法を見出さなくてはならない [...] あなたが赦してもらえるようになる方法を、妻を結婚前に惹きつけていた魅力をいささかなりとあなたが取り戻せるような方法を見出さなくてはならない……

しかし、そうした方法をいかなる政策に求めたらよいのだろうか? …それは果たしてあるのだろうか? …

「確かにあるのだ。」(1083)

ここに差しはさまれている疑問文は、一見、対話者である夫によって発せられたもののように見える。しかし、この箇所もやはりギユメで括られておらず、語り手が自問しているようにも見える。そればかりか、差しはさまれた疑問文とは逆に、語り手の肯定的答えの方がギユメで括られて価値づけられている。こうして上の引用部分では、想像される読者・対話者の声と語り手自身の内的思考とのあいだに、ほとんど区別を付けることができない。

以上の省察 1 と省察 18 のような例から、語り手の思考自体が非常に対話的であり、語り手は自分自身の思考の一部を他者の声として聞いているように考えられる。それは、ギユメの一貫しない使い方によっても示唆されている

のではないだろうか。

ここまで検討してきたように、語り手のディスクールは非常に対話的であり、そこには、想像上のさまざまな読者・対話者の声が響いている。そして、彼らの声による反応は語り手の思考の本質的な部分を占めており、それら多様な他者の声との対話の形を取って、語り手の思考自体が進展していくと言える。

3) 「自分自身」の声

省察 10 の中で、語り手は自らの個人的思い出を語る。この回想は「1822年、1月のある天気の良い午前中、私はパリの大通りを進んでいった」(1011)と始まり、ほぼ一人称小説のようにして展開する。ところが、回想の後半に至って、読者は奇妙な場面に遭遇する。舞踏会の最中、「私」は自分の先生の奥さんに出会う。奥さんが、持っていないはずの豪華なネックレスを首に掛けているのを目にして、「私」は驚く。

「ほら、変だぞ!…」と、私は、まだ社交界という大きな書物の中身を読んだこともなく、女心というものをただのひとつも見抜いたことがないある人物に言った。この人物とは、私自身だった。(1015)

この場面で、語り手は「自分自身」に対して、あたかも他人に向かって話しかけるように話しかけている。確かに、「ほら、変だぞ!…」という台詞を単なる独り言か、心の中の思考として解釈することはなんら無理ではないだろう。だが、そうした解釈のみで片付けてしまうには、「ある人物」を形容する表現があまりにも客観的である。また、語り手の淡々とした調子にも注意を要する。というのも、『結婚の生理学』のディスクールの語り口は、基本的に非常に諷刺的で滑稽なものだからだ。この一節はおそらく一種の冗談なのではあろうが、しかし、同時にそれ以上のものはらんでいるように思われる。

主体が「自分自身」に、あたかも一個の他者に向かって話しかけるように話しかけること。これは主体の分裂を示唆するだろう。ただし、問題の場面においては、言葉の発信者である「私」は、一個の他者のような受信者「私自身」の返事を耳にすることはない。この第二の自己は、「私」と別の声や別の意識をはっきり見せはしない。それゆえ、語り手が自分自身の声を他者の声として明瞭に聞くという現象を「主体の分裂」と考えれば、上の場面を厳密な意味で主体の分裂現象とみなすことはできないだろう。しかしながら、第二の自己は、確かに第一の自己に対して顕現している。このことから、少

なくとも上記の場面に、主体の分裂に非常に近い状況を認めることはできよう¹¹。

2. 自己転倒のメカニズム

本章では省察 16 の内容を検討する。この省察では、それまで語り手が読者に教示しその重要性を謳ってきた方法の有効性を奇妙にも語り手自らが否定してしまう。われわれとしては、その「ディスクール自己転倒」現象のメカニズムを、「他者の声」との関連において明らかにしたい。

1) 自己転倒の様相

主に省察 14 と省察 15 において、語り手は、強固な記号学的方法を妻の姦通防止法として聴き手である夫に詳述する。具体的には、妻を家の中で徹底的に監視し、さらに観相学的読み取りによって、妻の外側からその内面を完全に見抜くことである。そして、省察 15 の末尾、語り手はその方法の具体的な実践に関して、嫉妬深い夫の手腕に期待をかける。

続く「夫婦の憲章」と題された省察 16 には、実際、一人の大変嫉妬深い夫が登場するのだが、彼は、直前の二省察で語り手が述べたまさにその通りに「生理学的方法」を実践している人物なのである。そして、この嫉妬深い夫の邸宅における彼と語り手との対話が、省察 16 の大部分を占めている。参事院の請願調査官を務めているこの若い夫は、自説を述べ、自らの方法を説明する際、妻を民衆に喩える。彼によれば、自分は妻に夫婦の憲章を授けてやっているが、それは彼女に自由の幻想を見させながら、実質的に彼女を支配するためであるという。こうした夫の考えや実践は本来語り手を完全に納得させるはずであるにもかかわらず、対話のあいだ、彼はこの夫のことをしばしば馬鹿にしている。やがて対話を終えて語り手が帰りかけたとき、嫉妬深い夫は、長椅子の上に黒髪を数本見つけて、気も狂わんばかりになる。その場を去った語り手は夫のことを嘲笑うが、すぐに次のように自説の破綻を認

¹¹ バルザックにおける「主体の分裂」に類する現象については、彼が若い時に妹ロールに宛てた手紙に興味深い例がある。その手紙の中で、バルザックは「僕の召使は『モワ・メーム（僕自身）』というんだよ」と言って、「モワ・メーム」をまるで自分とはまったく独立した人物のように提示し、自分と「モワ・メーム」のあいだのやり取りをコント仕立てで長々と詳細に語っている。Cf. *Correspondance de Balzac*, éd. Roger Pierrot, Garnier, 1960-1968, 5 vol., t. I, pp. 30-31, 12 août 1819.

めて悲しみを覚える。「この唐突な出来事によって、私の最も重要な省察のうちの三つがまるごと覆され¹²、私の本のカトリック的無謬性は、その真髄を損なわれた。」(1059) さて、数日後に語り手が件の夫に再会すると、夫は、妻の姦通を思わせた髪の毛に関して別の解釈を見出し、安心を取り戻している。しかし、この省察は語り手の「それでも、お分りだろう、旦那さん方、あなた方の幸福は一本の髪の毛にかかっているのだ！」(1060) という皮肉な言葉で終わる。

バルザック作品における「イロニー」を見事に分析しながら、ジャン＝クロード・フィゼンヌは、この省察 16 を「哲学的対話を皮肉に、最も根本的に破壊した例¹³」と評している。なぜなら、この省察が「作者とその最高の弟子との教育的対話」を演出しながら、「著作全体にわたってこれ見よがしに主張されている諸説の価値の切り下げが、その対話のうちに準備されている¹⁴」からである。この言葉を探り上げて、カトリーヌ・ネッシも省察 16 の構造を「見せかけの対話である¹⁵」と呼び、ディスクールが自己転倒していることを示唆している。

ここで、われわれが基本的には同意するネッシの議論を概観しておこう¹⁶。省察 15 で語り手は、妻に対する観相学的方法の使用を説いているが、ネッシがそこに見出すのは、語り手の論理において、女性が「読まれるべき存在」「読まれうる存在」とみなされていることである。語り手は「言語の秩序の中に女性を閉じ込め¹⁷」ようとしているのであり、省察 16 に登場する「生身の彼の弟子」は、「指示されるべき現実にしっかり根差した¹⁸」、語り手の生理学的理論の実践者なのである。請願調査官の職にあるこの弟子の戦略も語り手と同じく言語への信頼に基づいており、彼は「夫婦の憲章」という言語の力によって、民衆同様に妻を支配しようとしている。そしてネッシが重視

¹² ここで「私の最も重要な省察のうちの三つ」とは、省察 14,15,16 のことであると考えられる。この引用部分については、のちに再び触れる。

¹³ Jean-Claude Fizeau, « Ironie et fiction dans l'œuvre de Balzac », in *Balzac, l'invention du roman*, Claude Duchet et Jacques Neefs éditeurs, Colloque international de Cerisy-la-Salle 1980, Belfond, 1982, p. 170.

¹⁴ *Ibid.*

¹⁵ Catherine Nesci, *La Femme mode d'emploi. Balzac, de la Physiologie du mariage à La Comédie humaine*, Lexington, French Forum Publishers, 1992, p. 197.

¹⁶ 以下にわれわれがその概略を紹介するネッシの議論に関しては、主に次の箇所を参照のこと。Catherine Nesci, *op. cit.*, pp. 125-134, 138-144. ただし、われわれはネッシが一貫して基本的に立脚しているフェミニスト的解釈には立ち入らない。

¹⁷ *Ibid.*, 129.

¹⁸ *Ibid.*, 143.

するのは、このコード化し法制化する権力が、長椅子の上の数本の黒髪という具体的な瑣事によって突然崩壊することである。それはすなわち、語り手によって提示された、対象を言語システムのうちに閉じ込めようとする戦略の欠陥が、指示されるべき現実によって露呈するということを意味しているだろう。実際、嫉妬深い夫によって綻びはいったん繕われたかに見えるが、このあと妻の自覚的抵抗が始まると、夫が認識し支配すべき妻という存在は、不透明な制御不能なものとなっていく。

2) 語り手と弟子との対話？

省察 16 には、確かにフィゼンヌやネッシが指摘するとおり、皮肉な自説の破壊、また現実を前にした言語システムの限界が表現されていると言えよう。ただ、嫉妬深い夫の位置づけに関しては、彼らの説は不十分であるように思われる。もちろん、『結婚の生理学』は、夫に妻の姦通防止法を教示するという体裁を取っているのだから、この嫉妬深い夫が、聴き手の代表として登場していると考えれば、一見、「弟子」という位置づけにはなんら問題はないように見える。だが、この省察における語り手と夫の対話は、果たしてフィゼンヌの言うように、「作者とその最高の弟子との教育的対話」なのだろうか？

まず、嫉妬深い夫の備えている現実性を検討しよう。ネッシは、この夫を「語り手の生身の弟子」であり、「指示されるべき現実にしっかり根差した」、語り手の生理学的理論の実践者である、と指摘していた。なるほど、この夫は、語り手が勧める姦通防止法の実例ではある。しかし、注目すべきは、語り手によるこの夫の描写に妙に具体性が欠けていることだ。「夫人の小部屋の戸を開ける」といったいくつかの動作を除けば、夫について語り手が描写しているのは、その声の調子、話しているときの態度、そして語り手の言葉に対する反応だけである。彼の顔や体の諸部分について、その色や形は全く描写されておらず、風貌は皆目分らない¹⁹。

嫉妬深い夫は、一個の他者として外部から語り手に働きかけているように見える。しかし、彼の存在はほぼその声と反応に拠るものである。夫は、理論家である語り手に対する完璧な実践家の役割を担っているが、その彼が行っているのは、対話に沿った自分の実践の説明である。したがって、嫉妬深い夫は、何よりもディスクールにおいて語り手を引き継いでいる存在なので

¹⁹ 嫉妬深い夫についての描写は、たとえば「[...]と彼は笑いながら言った」「嫉妬深い男は眉をしかめていたが、その表情はまた晴れ晴れとした [...]」といったものである。Cf. *Physiologie du mariage*, CH, t. XI, pp. 1050-1060.

ある。実際、両者の対話の中身はほとんど夫による自説の開陳や自らの実践策の提示によって占められていて、そこに語り手が短い質問や印象を差しはさむ形になっている。

次に、語り手と夫との間の「師弟関係」の問題を見てみよう。フィゼンヌもネッシも基本的に嫉妬深い夫を語り手の弟子とみなしている。フィゼンヌはそれ以上この問題に触れていないが、ネッシの方は、ある箇所では「そうとは知らぬ弟子²⁰」という言い方もしており、少なくとも、夫の側が自ら語り手の弟子をもって任じてはいないということは認識している。さらに、対話の最後に現れる、夫のナポレオンについての言及に注目して、ネッシは、そこにこの師弟関係の揺らぎを見出している²¹。『結婚の生理学』において法制化権力が瓦解することを取りわけ重視するこの研究者は、民法典の制定者であるナポレオンに共に依拠しているという点で、語り手と夫を同列化するのである。しかしながら、テキストをより仔細にたどれば、両者のあいだに「師弟関係」といった明確なヒエラルキーは、実は省察のはじめから存在していないことが分かる。

省察 16 は次のように始まっている。

パリでは、先立つ二つの省察で展開した方式にしたがって考案されている家は一軒しか知らないことを私は認める。しかし、私とその家にしたがって当の方式を作り上げたことも付け加えておかなくてはならない。(1050)

この一節は奇妙に映る。ここで言われている「家」とは、もちろん嫉妬深い夫の邸宅のことであるが、語り手は自らの理論に基づいた実践例としてこの夫の邸宅を挙げながら、一方、その語り手の理論自体が、事前に存在する夫の実践に基づいていると言うのである。読者はこの箇所から、語り手がこの嫉妬深い夫をよき弟子、よき実践者とみなしているという印象と、すでに行われていた夫の実践にむしろ語り手の側が学んだような印象の両方を同時に受ける。さて、上の冒頭部分に引き続いて、語り手は、自分がこの嫉妬深い夫の邸宅にはじめて招かれて対話したときのことを単純過去形で語り出す。すでに見たように、この訪問は夫の狂乱で終わり、語り手は「この唐突な出来事によって、私の最も重要な省察のうちの三つがまるごと覆された」と自説の破綻を嘆く。先ほどの省察冒頭部分を考え合わせれば、ここでの「覆された三つの重要な省察」は間違いなく、妻に対する徹底的監視と観相学的読

²⁰ Catherine Nesci, *op. cit.*, p. 129.

²¹ Cf. *ibid.*, p. 196.

み取りという語り手の理論が展開された 14 と 15 の二省察、およびその理想的実践例である夫が登場している省察 16 それ自体を指しているはずである。だが、そうすると語り手の理論と夫の実践をめぐる時間軸に関して、明らかに奇妙な事態が浮上してくる。かたや、省察の冒頭によれば、先行する夫の実践にしたがって語り手の理論が作り上げられたという話であったのに、他方、自説の破綻を告げる語り手の言葉によれば、彼の理論は——テキストにおける叙述の順序どおり——夫の実践を確認する前にすでに確立していて、実践上の不備から理論が破綻したということになる。こうして結局、省察冒頭部分で説明された「理論」と「実践」との関係は、一義的にどちらがどちらに基づくものとも言えず、かと言って相互に作用し合う関係でもなく、言わば、循環論法のような様相を呈している。したがって、語り手と嫉妬深い夫の関係についても、一方が他方の師であるとも弟子であるとも言うことはできない。彼らは、その理論と実践の関係同様、分離不可能なのである。

最後に、ナポレオンに関する嫉妬深い夫の言葉を、語り手のそれと比較してみよう。夫は自分の方法について次のように説明している。

「私の方式はみな」と、彼 [= 夫] は私に声をひそめて言った、「父が聞いた、離婚問題を議論する際にナポレオンが参事院の真ん中で発した、ちょっとした言葉から思いついたものなのです。『姦通とは、長椅子の問題である！』と、彼は叫んだのです。[…]'」(1058)

一方、語り手は、『結婚の生理学』の「序言」をこう書き出している。

「結婚というものは自然から発したものではない。[…]'。[…]'。

『民法典』を議論する際にナポレオンが参事院で発したこれらの言葉に、本書の著者である私は大いなる感銘を受けた。そしておそらく、知らないあいだに、これらの言葉によって、今日読者に供している本書の種が私のなかに蒔かれたのであろう。(903-904)

語り手はまた、作品の末尾近く、結論らしきものを提示するときにも、ナポレオンの言葉を引用する。

それに、本書冒頭にナポレオンの言葉を用いた以上、始め方と同じ終わり方をして、どうしていけないわけがあるか？ 参事院の真ん中で、第一執政は、次のような雷のごとき激しい言葉を発した。その言葉は、同時に結婚に対する賛辞とも諷刺ともなり、そして本書のまとめになるものである。「男がもし年を取らないのなら、余は、彼が妻帯することを望まぬであろう！」(1201)

作品を始めるときにも終わるときにも語り手がナポレオンの言葉に依拠していることは、この作品全体にとってナポレオンが本質的な存在であることをはっきり示している。上の夫の言葉から、彼の方式においても事情が同じであることが分かる。ネッシの指摘のとおり、ナポレオンについてのこれらの言葉によって、確かに、語り手と嫉妬深い夫とのあいだにある（見せかけの）ヒエラルキーは崩れることになる。しかしながら、以上に列挙した三つの引用箇所は、単にナポレオンの言葉を引き合いに出している点で共通しているのみならず、そこで用いられている表現や語彙の水準においてまで驚くほど似通っている。ナポレオン本人の言葉とされている部分を除けば、それらはほぼ同質のものと言ってよい。

ここまでの分析をまとめよう。第一に、嫉妬深い夫は具体的な肉体描写を欠いた「声の存在」であり、そのディスクールにおいて語り手を引き継いでいる。第二に、奇妙にも、夫と語り手両者の理論と実践は切り離すことができない。第三に、両者のナポレオンに関する言葉は、ほぼ同質と言えるほど細部に至るまで似通っている。以上のことから明らかになるのは、嫉妬深い夫が、語り手にとって単なる弟子や実践者ではなく、語り手の「分身」だということである。

「分身」という概念は、主体の分裂を想起させる。前節においてわれわれは、語り手が、自分自身にほかならない人物に向かって「ほら、変だぞ！…」と話しかける場面を検討した。その場面においては、語り手は「自分自身」の返答を得てはいなかった。それに対して、この嫉妬深い夫という分身は、語り手とは他なる声、他なる意識を持っている。したがって、ここで語り手は自分自身の声を他者の声として聞いている、とすることができる。

3) 自己転倒の過程における他者の声の働き

さて、語り手が分身と対話するという状況は、ここで非常に重要な問題を提起する。というのも、語り手の説明そのままに生理学的方法を実践する分身がディススクール上に呼び出され、彼が語り手と対話することによって、語り手による自分自身の方法の否定が行われているからである。

すでに触れたように、フィゼンヌは、この対話を「著作全体にわたってこれ見よがしに主張されている諸説の価値の切り下げ」のあくまで「準備」であると指摘していた。また、ネッシも、言語システムの完全性を根底から覆すという点から、対話のあとの黒髪事件に特に重要性を与えていた。さらに、語り手自身が、その事件によって自分の方法の信用が失墜したと言っていた。

なるほど、黒髪事件こそが語り手のディスクールの自己転倒を決定づけており、後続の省察において妻の姦通への本格的行動が考察されていくことになる。しかし、語り手と分身の対話の中には、すでにこの自己転倒の現象がはっきり現れている。われわれが目にするのは、そこでディスクールの自己転倒がどのように起こっているか、ということである。

先に引用した省察 16 の冒頭部分に引き続いて、語り手は、自分の理論の完全な実践例である件の嫉妬深い夫の家を訪問したときのことを語り出すわけだが、当然のようにこの回想は、この夫の仕事ぶりに対する賞賛から始まっている。「私は深遠な天才に感嘆した […]。私は、彼の夫人がこの住まいを裏切りの共犯者にすることは不可能であることを認めた。」(1050) 住まいを妻の姦通の共犯者にさせないこと、これはまさしく、「住居について」と題された省察 14 の主題である。このように、この嫉妬深い夫の仕事ぶりは語り手の生理学的方法にびたりと当てはまっている。ところが、この賞賛のすぐ次の行で、語り手は夫を「夫婦間の高度な政策についてあまり有能に見えない参事院のオセロー」(*ibid.*)と形容し、夫への否定的態度を窺わせる。語り手は、この正反対の二つの評価をなんの説明もなしに並置し、そのことが現実の読者を当惑させる。

ここから対話が始まり、その対話中ずっと語り手の態度は定まらないままである。そのことを次の一節が凝縮して示している。

「聖ヨゼフにかけて！…これこそが私と同じくらいに結婚の学を理解している男だ」と私は自分の中で呟いた。(1052)

この一節は一見、夫のことを賞賛しているかのように見える。しかし、「聖ヨゼフにかけて！」という表現が発言全体を皮肉なものにする。というのも、聖マリアの処女懐胎は、聖ヨゼフから見れば妻の姦通と考えることもできるからである。皮肉はここでは二つの要素からなる。語り手は、一方で夫を自分に等しい者として扱いながら、他方で、夫が寝取られ亭主になる定めにあることを暗示して彼を嘲弄している。対話全体を通して、語り手は自分の分身に対するこうした皮肉な態度を取り続ける。それによって、分身の発言内容はもちろん、それにびたりと当てはまる語り手自身の生理学的方法も、信用の置けないものとなってしまう。このように、語り手のディスクールは黒髪の場面の前からすでに自己転倒しているのである。

それでは、このディスクールの自己転倒の過程において、他者の声はいったいどのように機能しているのだろうか？ 重要なのは、ここで分身の声

として現れている他者の声が、自らすすんで一者である語り手のディスクールを転倒させて来ているわけではないことである。確かに、嫉妬深い夫には、語り手に対して他なる声、他なる意識がある。しかし、われわれが示したように、この夫はそのディスクールにおいて語り手を引き継いだ者なのである。言いかえれば、省察 16 の対話においてこの他なる声は、その時点まで一者が有していた声に一致しているのだ。したがって、自己転倒の過程は次のように表されるだろう。すなわち、その時点までの主体の状態に等しい存在が、主体の前に他者（の声）の形を取って現れ、そうすると元の主体が、この他者（の声）に対して同一化と差異化の二重の態度を示す。こうして語り手は自らのそれまでの声に対して他なる声をはらみ、ディスクールの主体として二重化する。その結果、ディスクールが不安定なものとなるのである。

「自分自身」と対話することによって、語り手は、それまでの彼本来の声に加えて、それとは他なる声をもはらむという状況を迎える。あるいは、先に検討した箇所において二つの声の並置が極めて奇妙だったことを考慮すれば、逆に、語り手が他なる声に捉えられるという言い方もできるかも知れない。省察 16 における語り手のディスクールの自己転倒は、「主体」と「自分自身」と「自分本来の声」をめぐるこのような現象であると考えることができる。

3. 不均質な主体

省察 16 は、すでに述べたとおり、『結婚の生理学』全体のディスクールの自己転倒における要の位置にあると言える。本章では、前章で明らかになった、省察 16 におけるディスクールの自己転倒のメカニズムを、作品全体を視野に入れた形でいま一度捉えなおしておこう。

1) 『結婚の生理学』の一貫性

本稿第 1 章での分析と第 2 章での分析を付き合わせてみれば、省察 16 の（疑似）対話におけるディスクールの自己転倒の過程に、語り手のディスクール全体にわたって見られる「他者の声」に関わる諸現象が、集約的かつ複合的に現れていることがはっきり見て取れる。

われわれが指摘した、「語り手をそそのかす声」とは違ったタイプの「他者の声」は以下の三つであった。第一に、挿入された他の語り手の声。語り手は、他者の声をしばらく自分の声のように見せかけて響かせたり、他者の声

を用いて読者に語りかけたりすることによって、ディスクールの主体として二重化していた。第二に、想像上の読者・対話者の声。語り手はディスクールの中で、絶えずさまざまな読者・対話者の反応を想像しており、それら多様な他者の声との対話の形を取って、語り手の思考自体が進展していった。第三に、「自分自身」の声。ある箇所、語り手は「自分自身」に対して、あたかも他人に向かって話しかけるように声をかけている。第二の自己の声を他者の声として明瞭に聞いていないとはいえ、そこには主体の分裂に非常に近い状況が生まれていた。

他方、省察 16 の対話においては、語り手は、自分自身の声を「分身」という他者の声として聞き、この分身（の声）と対話することによって、分身（の声）に対する同一化と差異化の二重の声をはらむことになる。こうして、語り手はディスクールの主体として二重化し、ディスクールの自己転倒が引き起こされていた。

このように、自己転倒のメカニズムは、すでに触れた主体の分裂だけでなく、そこに対話および主体の二重化という現象も複合的に加わって起こっている。さて、省察 16 にカトリヌ・ネッシが、現実を前にした言語システムの限界を見ていることはすでに述べた。それはまた、現実をその全体性において把握したい語り手の欲望とそれを逃れていく現実との相克が露わになったものとも言える。ここまでのわれわれの分析から明らかなように、バルザックにとって本質的なこの認識論的問題は、さまざまな形で他者の声をはらむ主体の不均質な性質に密接に関連しているのである。

こうして、『結婚の生理学』の語り手は多様な他者の声をはらみながら、常に自分自身からずれていく。ディスクールのトーンはめまぐるしく変化し、読者はしばしば、語り手が真面目なのかふざけているのか、あるいは深刻なのか皮肉を飛ばしているのか、夫側なのか実は妻側なのか、見当も付かずに困惑しつつその一貫性のないディスクールを追っていくことになる。

しかし、ここで作品全体の構成に目を転じてみよう。実は、一貫しないように見えるディスクールにもかかわらず、この作品は無秩序に書き流されているわけではない。それどころか、他者の声をめぐる現象によって自己転倒が完遂されるという意味では、よくできた構成だとさえ言える。

省察 7 までは後続省察のための準備であり、省察 8 「最初の症候」で妻の姦通への動きが始まる。そこから章を追うごとに夫側の危機は進行し、妻の姦通防止法を教示する語り手のディスクールも自己転倒を起こし、省察 27 「最後の症候」に至って妻の姦通が成し遂げられる。すると省察 28 以降、語

り手は作品当初の設定を超えて、姦通を規定事実と認め、老年に向かう夫婦を話題にする。同時に、作品冒頭で聴き手として排除したはずの女性（妻）読者に向かって「奥さん」と直接呼びかけ、また、若き独身者のはずが老いを感じ、老いた夫（これも彼の分身である）との対話によって自らの「若き独身者」という属性を一つの限界として否定的に示す²²。そして結局、最終の省察 30 では姦通が礼賛されてしまう。このように、後半になると、語り手の教示内容どころか作品のそもそもの設定までもが崩れていく。

さらには「後書き」が付いており、語り手は、自分がこれまでの内容を語って聞かせた公爵夫人と対話する。そこで公爵夫人がある逸話を語るのだが、それは、女性たちの策略をすべて知り尽くしたと思っていた哲学者がある人妻に恋し、夫に殺されかかりながら、人妻の機転で命拾いする、というものである。『結婚の生理学』にこの策略も書き込んでおくと言われた語り手が次のように答えて、作品は終わる。

「奥様」と私は公爵夫人に言った、「分りました！ もし結婚したら、私はまだ知らない何らかの企みにやられてしまうことでしょう。でも、そんな場合でも、見て下さい、おしどり夫婦ぶりを見せて、その時代の人たちを感心させてやりますから。」(1205)

こうした自己言及的操作により、作品の最後で『結婚の生理学』という本自体の無効性と教授然としていた語り手の無力性が高らかに謳われる。しかも、それもやはり対話の形においてである。

ここまでたどって来れば明らかだろう。『結婚の生理学』は、「他者の声との対話によって主体——ある領域内に囲い込まれた個としての——がその根拠を失っていく」という点において驚くほど一貫しているのである。

2) 自分自身との諸関係

最後に、存在の不均質な性質という観点から見過ごせないのは、省察 26 中の羞恥心についてのくだりである。そこで語り手は、ディドロやルソーの名を挙げながら、18 世紀の哲学者たちに対する不満を表明している。

「…」彼らの哲学は、感覚論に基づいたもので、人間の皮膚より先には進まなかった。彼らは外的世界しかじっくり見なかったのである「…」。(1171)

²² この語り手、聴き手の問題に関しては、拙論「バルザック『結婚の生理学』における文学的コミュニケーション」（前掲）を参照。

同時に、語り手はカトリック教を讃え、思惟の神秘や人間の魂の研究を次代の知として擁護する。とはいっても、別のところで語り手は 18 世紀哲学者やカトリック教に対してまったく異なった態度を見せており、彼の真意は測りたい²³。ただ目を引くのは、いま引用した箇所、外部から内部へと向かう語り手の生理学的視線の問題が窺われることである。しかも、このすぐあとで、語り手は「そういうわけで、ルソーの誤りは彼の世紀の誤りであった」(ibid.) と哲学者個人のみならず、それまでの知のあり方全体を批判している。

こうした言辭からは、18 世紀末から 19 世紀初頭の西欧社会において、経験と思考を秩序だてる知の枠組みに決定的な変化が起こったとするミシェル・フーコーの説が連想されよう。フーコーはその変化の様相をいくつかの領域に関して描き出しているが、その一つに博物学から生物学への流れがある。それまで博物学は、外的形態といった「可視的なもの (visible)」相互の表象関係に基づいて自然を記述し分類していた。ところが 18 世紀末近く、解剖学の重要性が再認識されてくるとともに、博物学に「組織・有機体 (organisation)」という概念が本格的に導入され、「可視的なもの」は、動物の栄養摂取機能や呼吸機能など「有機体」の持つ「不可視的なもの (invisible)」と関連づけられ、その「顕在化したしるし (signe manifeste)」とみなされるようになった。フーコーによれば、こうして、やがて有機体としての生物を扱う生物学が成立することになる、という²⁴。実際、上の引用部分の「人間の皮膚より先へ進む」という言葉は明らかに解剖のイメージであり、また、リュシアン・ダーレンバックも正しく指摘するように²⁵、『人間喜劇』のいくつもの小説で、ピアンションという医師が語り手としてバルザックの代わりを務めている。

とはいえ、われわれの目的は、『結婚の生理学』の語り手の言葉の中にバルザックの思想を直接探ることではない。したがって、ここでは、バルザックの抱えた認識・表象の問題が時代の知の状況と通低していたことを確認して

²³ カトリックに対する語り手の諷刺としては、省察 16 の分析中にすでに引用した二例がある：「聖ヨゼフにかけて！…」(1052)；「[...] 私の本のカトリック的無謬性は、その真髄を損なわれた。」(1059) また、18 世紀の哲学者に関しては、上の羞恥心のくだりの少し先で不貞について説明する際、語り手はディドロに依拠している。*Physiologie du mariage*, CH, t. XI, p. 1173 を参照。

²⁴ 特に以下の箇所を参照。Michel Foucault, *Les Mots et les Choses*, Gallimard, 1966, pp. 140-158, 238-245, 275-292.

²⁵ Cf. Lucien Dällenbach, « Le tout en morceau (*La Comédie humaine* et l'opération de lecture II) », in *Poétique*, n° 42, Éditions du Seuil, avril 1980, p. 157.

おけば足りる²⁶。むしろ注目すべきは、「そういうわけで、ルソーの誤りは彼の世紀の誤りであった」という言葉に続けて、語り手が「ルソーの誤り」を次のように断じていることだ。

彼〔＝ルソー〕は、羞恥心を、人間が自分自身に対して持つ諸々の心的関係から説明せずに、人間同士のあいだにある諸関係によって説明したのである。
(*ibid.*)

語り手は、認識・表象の問題をここではっきりと、人間と自分自身との内的関係の問題に結びつけている。確かにこの一節は、あくまで分析される対象について述べたものであろう。しかしながら、われわれが検討してきた、他者の声に関わるディスクール諸現象が明瞭に示しているのは、『結婚の生理学』では、分析対象のみならず分析する主体の側もまた、均質なひとかたまりではなく、絶えず自分自身との諸関係をはらんでいるということである。

おわりに

バルザックは、その壮大な文学世界を紡いでいくうえで、あらゆるものに接近し、把握し、すべてを一つの大きな体系の形で描き出そうとした。この欲望は、彼のうちに一貫して激しく燃え盛っていたはずである。本格的な創作活動のごく初期のころから、バルザックは自分の諸作品をグループ化してそこに一つの意味を与える操作を行っている。また、早くも1834年には、愛人であるハンスカ夫人に宛てて、後の『人間喜劇』にほぼそのまま結実する作品群の構想を語っている²⁷。さらには、それまでの作品が『人間喜劇』としてまとめられ刊行されていく時期には、「人物再登場法 (le retour des personnages)」を駆使して過去の版に手を入れ、さまざまな作品をなじみの主役、脇役の姿によって緊密に結び、まさに想像された一つの社会を織り上げていく。しかし、この体系化の動きにおいて、バルザックは決して描く対象を静的な固定化した形に囲い込むことをしなかった、あるいは、できなかった。

²⁶ なお、バルザックの科学一般に関する素養形成については、次の研究書に詳しい。特に同書第2部のはじめの数章を参照。Madelaine Ambrière-Fargeaud, *Balzac et La Recherche de l'Absolu*, PUF, 1999.

²⁷ Cf. *Lettres à Madame Hanska*, éd. Roger Pierrot, Laffont, « Bouquins », 1990, 2 vol., t. I, pp. 204-205, 26 octobre 1834.

『結婚の生理学』のディスクール自己転倒には、このバルザックにおける現実の認識と表象の問題が生々しい形で露呈していると言えるのではないだろうか。もちろん、語り手の遊戯的ディスクールの一切を演出しているのは作者バルザックであり、このようなディスクールの様相のうちに、バルザックの政権諷刺の含意や、大衆受けを狙っての通俗的な流行本の模倣を見ることが不可能ではあるまい。しかし非常に興味深いのは、この作品が、初版刊行後もほとんど加筆、修正をされないまま、本稿冒頭で述べたように、暫定的であれ『人間喜劇』の頂点に立つ作品として刊行されていることである。

『結婚の生理学』の冗談めかした部分を否定的に評価し、作家本人にとっても不本意な作品と捉えるルネ・ギーズは、この事実に驚きを隠さない²⁸。その真相は分らないにせよ、あれほど熱心に自作に手を加え続けたバルザックにとって、これは何を意味するのだろうか？ 奇妙にも遊戯的に自己転倒するディスクールこそが、彼にとって何か決定的なものだったのではないか、そのような推察も成り立ち得るように思われる。そしてわれわれは、その自己転倒現象が、ディスクールの主体の内部にさまざまに響く他者の声と密接に関わっていることを明らかにした。

一方では、前稿に見たように、体系的解釈を押し付けようとする主体に対して、むしろ認識すべき「現実」の方が他者の声として主体を襲い、その認識を導いていた。他方、本稿の分析によれば、認識する主体自身が不均質であり、多様な他者の声をはらみながら「自分が自分自身からずれていく」という事態が進行していた。これらは裏を返せば、「現実」に対して食欲に向かうバルザック的主体が、ともに常に流動的である対象にもまた己自身にも開かれていたことの何よりの証左ではないだろうか。

²⁸ Cf. René Guise, « Histoire du texte » à la *Physiologie du mariage*, CH, t. XI, p. 1743.